

## 散文詩のリライト学習材としての可能性

——萩原朔太郎「郵便局」を例として——

石 塚 修

### 0. はじめに

文学教育で学習者の主体的な「読み」を促すための方策はこれまでもしばしば問題とされてきた。本稿では萩原朔太郎の文語詩「郵便局」の「書き換え」を試行することで、「書き換え（リライト）」（以下、リライトとする）が文学教育にどのような学習効果をもたらすかについて検証する。

「書き換え」については、「リライト」や「翻作法」という用語で国語科教育においてこれまで実践がなされている。田中宏幸は、

生徒が積極的に発言したり、文章を書いたりするように導くには、「想」（書くべき内容）の形成を促すと共に、「形」（表現形式）を習得させる必要がある。ところが、これを両立させることはきわめて困難なことでもある。「想」の形成に重点を置こうとして記述前の指導に時間をかけすぎると、その段階で疲れてしまい、かえって表現意欲を削いでしまう結果となりやすい。他方、「形」の習得を優先しすぎると、形骸化したリアリティのない作文ばかりが生まれるということになる。この二律背反的な問題を解決してくれる指導法として近ごろ注目されているのが、「リライト作文」である。

「リライト作文」とは、「何らかの原作をもとに、それをなぞったり変えたりして表現する」作文である。首藤久義は、これを「翻作表現」<sup>(注5)</sup>と呼んでいる。府川源一郎・高木まさきは、「書き換え」<sup>(注6)</sup>と呼び、認識力を育てるのに効果的な指導法であると評価している。<sup>(4)</sup>

（注5）首藤久義『書くことの学習指導』編集室なるにあ 1994年

（注6）府川源一郎・高木まさき／長編の会『認識力を育てる「書き換え」学習—中学校・高校編—』東洋館出版 2004年

とその効果を指摘する。田中は「作文」に焦点をあてて論じているけれども、リライトの持つ教育的効果が明確に指摘されていると考える。

また、リライトを広くとらえて「翻作法」とした首藤久義は、その教育的な効果を、

「翻作表現」とは、なんらかの原作をもとにして、それをなぞって声で表現したり、文字で表現したり、さらには、絵や音楽や身体運動で表現したり、というようにいろいろな方法で表現することです。……翻作法の第一の利点は、学習活動を意欲的で積極的なものにすることです。翻作法では、原作にした作品の理解を確かなものにしたり、その作品の内容や表現方法を学ん

だり、自分自身の表現力を高めたりすることができます。それは、より広い視野から見ると、文化の継承と創造に参加することになります。翻作法には「表現活動を通した精読の方法」という特徴もあります。翻作法は、言葉の力を豊かにする、楽しくて実りある学習方法です。<sup>(3)</sup>としている。最近では、高木まさきも、

「カレーライス」や「走れメロス」の書き換え、創作活動をすることで読みが深まるということもあります。<sup>(4)</sup>

との指摘をしている。

今回は、萩原朔太郎「郵便局」を用いて詩におけるリライト指導のあり方を試行した。リライトの対象として詩を選んだのは、仁野平智明が、

読む行為によって学習者の中に生じたものを、テキストの言葉に即して意識的に言語化してとらえることに、読む学習の意義はあると考える。問題は、なぜ詩を読む必要があるのか、詩ならではの学習指導はあるのかということである。<sup>(4)</sup>

と問題提起しているような詩の指導を目指すには、リライトを取り入れることが、従来の読解中心の詩の指導に少しでも改善できる方策となるのではないかと期待したからである。

## 1. 萩原朔太郎「郵便局」

萩原朔太郎「郵便局」は『若草』（1929年3月号）に発表され、文詩集『宿命』（1939年 創元社）に収められた散文詩である。

郵便局といふものは、港や停車場と同じく、人生の遠い旅情を思はすところの、悲しいのすたるぢやの存在である。局員はあわただしげにスタンプを捺し、人人は窓口に着いてゐる。わけても貧しい女工の群が、日給の貯金通帳を手にながら、窓口前列をつくつて押し合つてゐる。或る人人は為替を組み入れ、或る人人は遠国への、かなしい電報を打たうとしてゐる。

いつも急がしく、あわただしく、群衆によつてもまれてゐる、不思議な物悲しい郵便局よ。私はそこに来て手紙を書き、そこに来て人生の郷愁を見るのが好きだ。田舎の粗野な老婦が居て、側の人にたのみ、手紙の代筆を懇願してゐる。彼女の貧しい村の郷里で、孤独に暮してゐる娘の許へ、秋の袷や襦袢やを、小包で送つたといふ通知である。

郵便局！ 私はその郷愁を見るのが好きだ。生活のさまざまな悲哀を抱きながら、その薄暗い壁の隅で、故郷への手紙を書いてゐる若い女よ！鉛筆の心も折れ、文字も涙によごれて乱れてゐる。何をこの人生から、若い娘たちが苦むだらう。我我もまた君等と同じく、絶望のすり切れた靴をはいて、生活(ライフ)の港港を漂泊してゐる。永遠に、永遠に、我我の家なき魂は凍えてゐるのだ。

郵便局といふものは、港や停車場と同じやうに、人生の遠い旅情を思はすところの、魂の永遠ののすたるぢやだ。<sup>(5)</sup>

詩としては少し長く、仮名遣いも歴史的仮名遣いであるために、学習者には一見すると親しみにくいようにも考えられるが、実際に学習者たちに音読させると、あまり読みにくさを感じている者はいなかったようである。

また、内容が現代の生活感覚とはかけ離れている部分が多いのではないかという指摘もあろう。しかし、試行の対象者に第一次感想を書かせたところ、37名中、「郵便局は様々な人々の生活を感じる場であること」16名（43.2%）・「郵便局は人と人とが伝えあう場であること」11名（29.7%）・「郵便局は人生の悲哀・郷愁を感じる場であること」8名（21.6%）・「郵便局は生活の苦しさを感じる場である」2名（5.4%）ということがらをこの詩から読み取っていた。<sup>64</sup>これらはこの詩の「読み」として、けっして的外れなものではなからう。この結果は「郵便局」という詩は、現代の学習者でも一読すればおよその内容の把握ができる学習材であり、けっして学習材として時代錯誤したものではないことを示唆するものでもあり、リライトの学習材として適切であると判断した。

「郵便局」を人間がさまざまな思いを抱いて集まる場所、自分の心を伝えるためにやってくる場所として、「港や停車場と同じく」、「人生」を感じる場であることを、詩として読み再認識することは、学習者に「生きる」ことを考えさせるうえでも大切であろう。平岡敏夫が「日常的といえどもことに日常的だが、その機能によって非日常的な空間ともなっているのが郵便局である。……だれもが利用する空間でありながら、郵便局は人をひきつける特別な空間でもあるのだ」<sup>65</sup>と指摘するように、郵便局は現代にあっても、そこにはさまざまな事情の人のびとが集まってきて、それぞれの人生を背負った郵便を出す場として機能しているという点は変わらないはずである。

以前にも指摘したが「書くこと」指導などでも学習者たちには学校生活にのみ取材した学習材ばかりでなく、もっと学校外の社会に視野を広げるような学習指導を促すべきと考える。<sup>66</sup>その足がかりとして、学習者たちの日常生活と密接に結びつく社会的な存在を扱った学習材を選定することは重要な課題である。日常生活でのゴミ問題に取材したような説明的文章で得られるような実感を、文学作品であっても基盤として授業展開できるような学習材も取り入れていくべきであろう。「郵便局」は学習者たちに身近な公的施設を素材としており、その点でも学習者たちに読ませたい詩でもある。

## 2. 授業の実際

今回の試行はあくまでも「郵便局」の「リライト」の学習材としての適否を考察しようとしたため、実際の高等学校の生徒での実施ではなく、国語教師を目指す大学2年生を対象とした。

実施対象 B 大学文学部2年生

調査日 平成21年11月

第1時 郵便局についてどのようなイメージを持っているか書かせる。(資料1参照)

「郵便局」を音読しながら、鑑賞する。

第2時 「郵便局」の翻作(課題)<sup>67</sup>

郵便局についてのイメージの変化を書かせる。(資料1参照)

この試行は大学における教職科目（国語科）のなかで実施した。翻作は課題として2週間ほど期間を与えて各自に作成させて提出させた。

学習者の提出した作品から、典型的な3作品を例として、この作品の「リライト」における問題点を分析してみる。

（作品例A）

「立ち食いそば屋」

立ち食いそば屋といふものは、港や停車場やと同じく、人生の遠い旅情を思はすところの、悲しいのすたるちやの存在である。店員はあわただしげにそばをゆで、人人はカウンターに群がっている。わけても貧しいフリーターの群が、さいふの中身を気にしながら、券売機に列をつくって押し合っている。

いつも急がしく、あわただしく、群衆によってもまれてゐる、不思議な物悲しい立ち食いそば屋よ。私はそこに来てそばをすすり、そこに来て人生の哀愁を見るのが好きだ。

初めて入ったであろう幼さの残る青年が、注文の仕組みが分らず困惑している。

立ち食いそば屋！私はその哀愁を見るのが好きだ。生活のさまざまな悲哀を抱きながら、その薄暗いカウンターの隅で、そばをすすっている若い男よ！かき揚げを入れる金も無く、ただ一心にそばをすすっている。何をこの人生から、若い男たちが苦しむだらう。我我もまた君等と同じく、絶望のすり切れた靴をはいて、生活（ライフ）の港港を漂泊してゐる。永遠に、永遠に、我我の家なき魂は凍えてゐるのだ。

立ち食いそば屋といふものは、港や停車場と同じやうに、人生の遠い旅情を思はすところの、魂の永遠ののすたるちやだ。

この作品は、昭和初期の労働者階層の郵便局での姿を、現代の立ち食いそば屋に巧みに移してリライトしている。現代の格差社会の持つ不安感を見事に描写している点で評価できよう。とくに下線部を付した部分は、リライト者の創作力がはたらいっていると思われる部分である。全体的に形式を追っただけのようにも見受けられるが、「かき揚げを入れる金も無く」や「ただ一心に」といった表現上の工夫にリライト者の個性が表出している作品といえよう。

「郵便局」の「窓口」を「カウンター」と改作しているところにも注目すべきである。それは先に挙げた平岡論文で指摘されている「窓口」という郵便局における人びとのドラマを描き出すための〈装置〉を「カウンター」という〈装置〉に置換しているからである。萩原朔太郎が「窓口」に関心をもって試作していたことは、「郵便局の窓口にて」（1927年）という詩のあることからわかる。リライト者はそうした「郵便局」の詩としての構造についても、リライトを通じて自然に理解している可能性がある。

（作品例B）

「電車」

電車といふものは、自転車や一人歩きやと同じく、人生の長旅を思はすところの、悲しいせんちめんと存在である。人々は狭い箱の中に押し込められ、駅員は抑揚なくアナウンスする。携帯電話を手にした人の列が、どこまでも続いている。ある人は音楽を聴き、ある人はゲームをしている。

いつも定刻に、あわただしく、人を拾っていく、不思議な物悲しい電車よ。私はそこで広告を眺め、乗っている人の現在（いま）を想像することが好きだ。揃いのかばんを持った二人の小学生が乗ってきて、

おしゃべりもせず、参考書を開いている。中学校受験のためのふ厚い参考書である。

電車！私はそこで現在を見るのが好きだ。日々のストレスに耐えながら、狭い車両の隅で、新聞を読んでいる中年のサラリーマンよ！新聞は折り目だらけになり、かばんは重そうにふくらんでいる。この不況の世の中のいったい何に、彼等は立ち向かっているのだろうか。我我もまた彼らと同じく、学生とアルバイト二足のわらじをはいて、顔の無い駅で下車している。永遠に、永遠に、我我の家なき魂は終点に着くことはないのだ。

電車といふものは、自転車や一人あるきやと同じやうに、人生の長旅を思はすところの魂の永遠のせんちめんとだ。

「電車」という題材はAの作品例と比較すると、素材がやや凡庸であるけれども、学生生活での限られた社会体験のなかではある程度はやむを得ないであろう。資料2（題材一覧）によると、「電車」は2例であるけれども、「駅」の9例を加えると全体の4分の1近くが鉄道関連の場に注目しているのは、リライターたちの学生生活で社会人を実際に見るという機会は、通学の際に使う交通機関が多いことも影響していると言えよう。むしろ、こうした実情があるからこそ、日常生活を改めて見つめ直させる機会を多く持てるような学習材の工夫が必要なのである。

BのAとの大きな相違点として、下線部について翻作している点が挙げられる。「自転車」・「一人歩き」に「電車」との共通点を見出そうとしているのである。ただし、この点はとても重要であり、「対比」により類似点を明確にするとともに、「電車」の異質な点も考慮することにつながるからである。

また、下線部にある「乗っている人の現在（いま）」という表現にも注目すべきであろう。「郵便局」で描かれている現実社会で生きる人びとの生活を読み取れているからこそ用いられた表現であるからである。公共の場に身を置き、そこで現代社会のあり方や問題点を見つめようとするリライターの意図がうかがえる。原作を語句だけ入れ替える「なぞる翻作」を超え、新たな表現を創作している姿がそこにあると言える。

ひらがなの「せんちめんと」も「のすたるじあ」の書き換えも、リライターが原作の雰囲気をつかみ、自分なりの外来語による感情表現を探し、ひらがな書きの効果も生かしている点は評価できよう。

（作品例C）

「教習所」

教習所といふものは、大宮駅とよく似ている。

行き交う人々はそれぞれ何か“目的”を持って行動している。

彼はデートに、サラリーマンは仕事に、あのおばさんは何の為に？

一人残された僕はどこに向かえば良いの？

教習所といふものは、学生とよく似ている。

授業のチャイムが鳴ると、慌ただしく動き出す点。

静まりかえるキャンパスに僕は一人で立ち尽くす。

一人残された僕はどこへ行けば良いの？

教習所といふものは、未来によく似ている。

人は日々、一歩ずつ現在から未来へと足をのばす。

自分の後ろに出来た道をたまに確認し、自分の道が外れないように前へ進む。

一人残された僕はどうすれば良いの？

教習所は多分どこにも似ていない。

一人残された僕は、車に乗れば良い。

一人残された僕は、授業を聞けば良い。

ここには、全てがそろっている。

この翻作はいわゆる「なぞる翻作」からは逸脱しているが、リライト者が創作という活動により積極的に取り組んだためとも考えられる。「教習所」の持つ特性を何か他の「もの」にたとえて表現しようとしている点で、原作である「郵便局」の本質をとらえようとしている。こうした作品をリライト作品としてどのように評価するか、リライトの評価では問題となる点であろう。教師が「なぞる翻作」を意図して課題を与えた場合、その指示にたいして忠実でないということと低い評価とするか、積極的に独自の創作活動に踏み出しているという点で高く評価するのか、評価者によって規準が分かれるところであろう。そもそもリライトは創作への階梯であり、最終的には学習者が独自の表現へと進むことができることは高く評価されるべきことかも知れない。ただし、指導者が提示した課題を取り違え、勝手な解釈をした結果の表現であるならば、学習活動としては問題である。このCの作例は、その点で、「郵便局」に人生のさまざまな側面を見つめようとした原作の意図は酌みとっているといえるのではなかろうか。ただし、大学の文学部の学生レベルでなくては、なかなかここまでの作品としては創作できないであろうから、高校生などに実際に授業としておこなう場合には、Cのような作例にまで発展させるのではなく、「なぞる翻作」でとどめておくような指導の方策が求められよう。

### 3. リライト作品への学習者からの評価

2で示した、A-Cの作品について、学習者たちはどのようにとらえるのか、試行した次年度(2010年度)履修者37名を対象に作品の感想を求めてみた。

その結果、Aを支持したのは5名(13.5%)・Bを支持したのは18名(48.6%)・Cを支持したのは14名(37.8%)となった。その理由を選んだ素材(内容)、「郵便局」形式を踏襲している(形式)という観点から分類すると、Aの例は内容3名・形式2名、Bの例は内容15名・形式3名、Cの例は内容8名・形式6名という結果であった。

Cのような形式を離れたリライトにオリジナリティーを感じて高く評価する姿勢は、文学作品は独自性が重要であるという認識の表れであろう。実際、「形式」の評価では6名中3名が「オリジナリティー」という語を用いて評価していた。またCにおける「？」の多用も評価者の注目点になり、独自の表現の特徴として高く評価されていた。

Aは「郵便局」と形式を同じくしている点が『「郵便局」の詩の形式が、ここまで『立ち食いそば』にも当てはまるのかと思った』などと評価されていた。反面、オリジナリティーという点では高い評価が得られなかったようである。

もっとも多くの支持を得たBについては、やはり「電車」という学習者たちと最も身近な存在をあつかっている点にある。調査した大学は半数以上の学生が電車で通学しており、そうした環境も影響しているのかも知れない。

ここから判明したことは、やはり「詩」の「リライト」という学習では、定型詩でない場合には、元になる詩の形式をそのまま踏襲することに学習者たちは消極的であるということである。詩はやはり作者による独自の表現形式を開発すべき存在であると考えているためであろう。文学部という調査対象の事情もあるかも知れないけれども、高校生であっても「詩のリライト」という学習活動ではそうした傾向は予想される。

この点は評価とも大きく関わる点であろう。Aのように元の詩の形式をふまえて名詞の部分のみを置き換えている「リライト」はむしろ「リライト」として高く評価できないのである。教師の側からすると、忠実な模倣であるから自分勝手に作られたCと比較して高い評価をしたくなるかも知れないけれども、それは学習者の評価とかなり乖離がある。積極的に独自性を出してリライトしようとした学習者の態度を評価しない結果になることは避けなくてはなるまい。

### 3. おわりに

今回の試みは、学習者たちに「リライト」を通じて、原作への主体的な「読み」を可能にする学習活動を実践する素材として、「郵便局」が適切かどうかを確認しようとしたものであった。その結果、「郵便局」の描いている作品世界は現代にも十分通じるものであり、学習者の「読むこと」学習が「郵便局」の翻作によって可能になることが検証できたと考える。

さらに（資料1）の表からもうかがえるように、学習者たちは「郵便局」のリライトを通して、日常生活で何気なく見過ごしてしまうあたりまえの街中の光景を、改めて見つめ直し、人が生き生きと活動している「生きた場」として見直すようになっていく点にも注目すべきであると考えられる。「郵便局」という存在が社会科の教科書で学習するようなたんなる公共機関としての表層的な無味乾燥な場のイメージでとどまっていたものが、リライトを通して、学習者が人々が「生きた場」としてとらえ直していることは、国語科ならではの学習効果であると言えよう。その変化のなかで学習者たちは（表2）のように「郵便局」と相通じる多様な場を、日常生活の中から見出し、自己との関係を結び直しているのである。こうした再認識こそは、先の田中氏のいう「書くこと」指導における「想」を養うことにも通じ、リライトが学習者の内面に新たな視座を与える学習となっていることを示すものである。

しかし、その一方「郵便局」のリライトは、定型詩でなかったため、近藤真の島崎藤村「初恋」での実践のように、学習者には形式の定型による表現活動の促進は効果的には見られなかった。<sup>40)</sup>

詩の創作における表現の自由さは、学習者にとってオリジナリティーの発揮できる貴重な場であるけれども、時としてその表現に溺れてしまい、せっかくの発想を表出できないという事態もあり得る。リライトは、表現能力が乏しいためせっかくの発想を表出できない学習者に定型を与えることで学習の促進を図ることができる方法である。「郵便局」にもそうした定型に近いパターンが見られることから、そうした学習を促す効果を期待したけれども、残念ながら今回の試行ではその点については十分な効果が得られなかった。

リライトに限ることではないけれども、学習目標に適切な学習材をどのような学習活動とともに提供できるかは、国語科の授業に限らず、授業構成のうえで大切な要素である。今回の試みの結果から、高校生段階の学習者（中学生段階でも一部は可能かもしれない）に「生きること」の「発見」を促すための学習に、萩原朔太郎「郵便局」の「リライト」は生活環境の再認識という点から有効性が高いことが提案できたものと考ええる。

#### 注

- (1) 田中宏幸「求められている学力と国語科教育」『岡山高校国語』42号 岡山県高等学校研究会国語部会 2007
- (2) 首藤久義・卯月啓子編著『翻作法で楽しい国語』東洋館出版 2004 p.8
- (3) 高木まさき「ことばと学びをひらく会」第3回基調講演 ことばと学びをひらく会 HP [http://www.kotoba-manabi.jp/kai03/kai03\\_result\\_kicho.html](http://www.kotoba-manabi.jp/kai03/kai03_result_kicho.html)(2010/5/29) 閲覧
- (4) 仁野平智明「意味の生成を意識させる詩教材の指導」『月刊国語教育研究』455 日本国語教育学会 2010.4 p.51
- (5) 萩原朔太郎全集第2巻 筑摩書房 1976年
- (6) 平成22年度B大学2年生を対象に調査した。
- (7) 平岡敏夫「萩原朔太郎 郵便局の窓口で」『國文學—解釈と教材の研究—』學燈社 1987.3 pp.46-49
- (8) 石塚修「『生活』と『書くこと』の関係の重要性」『人文科教育研究』32 人文科教育学会 2005 pp.101-116
- (9) 首藤久義らによるとこうした翻作は「なぞる翻作」とされる。
- (10) 近藤真「『詩歌』の創作—定型が表現を促進する—」高木まさき編『情報リテラシー』明治図書 2009 pp.135-142



資料1 郵便局のイメージの変化と翻作した場所〈抜粋〉(2009)

自分と相手の仲を往復するための窓口。お金も手紙も荷物も扱ってくれる万能な所。	笑顔が絶えず、一人一人の思いを運ぶ窓口、幸せな思いを持った人が来ると思っていたが、そうではなく、郷愁や悲哀など、想像していたこととは逆のことが書かれてあってびっくりした。	開店前のスーパー
私にとって郵便局は、相手に届けてほしいものを受け入れる、信頼できる温かい所。	唯一の連絡手段であるとして頼っている人も多く、人と人とのつながりを作る上で、重要な役割を果たしている所である。	美容室
あまり大きくない、町の郵便局が思い浮かぶ。手紙や物を送ったり、お金を支払ったり、預けたりする。	暖かい場所を想像したが、正反対のさびしく悲しい場所というイメージに変わった。	教室
ポストに入っているすべての手紙を送ってくれる。切手。はがきが買える。お金がおろせる。年賀状を出せる。	手紙を出すのにも、人によってそれぞれ事情があったり、嬉しい気持ち・悲しい気持ち、様々な感情が詰まったものが集まる場所。	図書館
静かなイメージ。人も少なく、事務的なことをすると堅い感じ。	外から郵便局を見ていたが、郵便局には人の人生が表れている。	公園
とても清潔感にあふれていて、基本的に人で混んでいる(特に年配の方で)。働いている人は毎日忙しそう。	民間の事務的な場所だけだと思っていたら、哀愁ただよう、個々の人々の思いも多くつまっている場所。	交差点
手紙の配達を受付に携わる。ところ。たくさんの人から人への思いが集まる場所。	元々明るいイメージだったが、人々の悲しみや辛さが集まる暗いイメージが生まれた。	コンビニエンスストア
いろいろな人が託した、様々な思いが詰まった手紙を外の広い所へ送るために収集する場所。→人間の喜怒哀楽が集まった場所。	喜怒哀楽だというイメージだったが、どうやら哀しみ(悲しみ)が集まった場所なのだとわかった。忙しく、あわただしいのに悲哀が詰まった郵便局は、人々の人生を描いた場所である。	遊園地
お金をおろす所なので、小さい時は近寄りたかった。ゆうパックの雑誌が面白い所。母とよく行く所。赤いテマークの所。	自分と、遠い所をつなぐ窓口。郷愁を連想させ、人々がたくさん入り混じる所。	駅
手紙を人から人へわたす場所。人と人との交流を手助けする場。	慌ただしく、人々がせかせかとしているイメージ。また働いている様。色々な人々が様々な想いを抱きながら訪れる場所であり、その思いを届ける役割を担っているところ。淋しい、悲しさがある場所。	学習塾
様々な人からの手紙を集め、その送り手の気持ちのこもった手紙を受取人へ届ける場所。	明るくにぎやかなイメージだと考えていたが、この詩の中では暗く陰気なイメージが表わされている。思っていた以上に人と人のかかわりがある場所。	病院

資料2 題材一覧(2009)

題 材	作品数
駅	9
コンビニエンスストア	3
スーパーマーケット	3
図書館	3
電車	2
公園	2
ファミリーレストラン	2
学校	2
教室	1
職員室	1
体育館	1
音楽室	1
購買部	1
学習塾	1
病院	1
保育園	1
遊園地	1
美容室	1
駄菓子屋	1
立ち食いそば屋	1
八百屋	1
教習所	1
宅急便	1
ラグビーグラウンド	1
交差点	1
街	1
いなか町	1
故郷	1
厳冬(北国の冬)	1
祭り	1
計	48